

聖書日課 『からし種』 2020.5.3-5.10

<p>5月3日 (日)</p> <p>歴代誌下 15章</p>	<p>「彼らは、心を尽くして、魂を尽くして先祖の神、主を求め、子供も大人も、男も女も・・・契約を結んだ」(12-13節)。イスラエルの人々は主の前に、当時「人」として認められていた男性だけでなく、子どもも、モノとして存在していた女性たちも、主と契約を結び、主に礼拝をささげた。「わたし」と主の契約と、信仰共同体の中で生きることを大切にしたい。</p>
<p>4日 (月)</p> <p>歴代誌下 16章</p>	<p>「アサの事績は、初期のことも後期のことも、『ユダとイスラエルの列王の書』に記されている」(11節)。アサの心はその生涯を通じて主と一つであった(15・17)が、治世第36年以降のアサの生涯は、主の平安が備えられていなかった。最後の時、アサは、主を求めず、人の力にすがっていった。アサの姿から、人間の弱さを知る。主の業に期待して歩みたい。</p>
<p>5日 (火)</p> <p>歴代誌下 17章</p>	<p>「彼らは主の律法の書を携え、ユダで教育を行い、ユダのすべての町を巡って、民の教化に当たった」(9節)。イスラエルの民は家庭教育を大切にしていたが、ここでも教育を大切にしている主の民の姿を見ることができる。主の律法の書を基において教育を行った。主の民として生きること、礼拝をすること、礼拝共同体と共に生きることを伝えたのだろう。</p>
<p>6日 (水)</p> <p>歴代誌下 18章</p>	<p>「ミカヤは続けた。『主の言葉をよく聞きなさい。わたしは主が御座に座し、天の万軍がその左右に立っているのを見ました』」(18節)。主の未来の計画があるけれども、その言葉を信じるには勇気がある。しかし、主がすでに王座に座っておられることを聖書は示してくれている。先の見えない状況の中でも主の希望が私たちに備えられていることを心にとめて。</p>

聖書日課 『からし種』 2020.5.3-5.10

<p>7日 (木)</p> <p>歴代誌下 19章</p>	<p>「人のためではなく、主のために裁くのだから、自分が何をすべきか、よく考えなさい。裁きを下すとき、主があなたたちと共にいてくださるように」(6節)。主の裁きは命を奪うものではなくて、一つ一つの命が大切に生かされるため。主が生きてよいと思われる一つの命が生かされるために、主のたどしい裁きが下る。主のたどしさを祈りもとめて。</p>
<p>8日 (金)</p> <p>歴代誌下 20章</p>	<p>「そのときあなたたちが戦う必要はない。堅く立って、主があなたたちを救うのを見よ。…恐れるな。おじけるな。…主が共にいる」(17節)。敵を前にすると、恐れを感じてしまう。しかし、私たちが救って下さるといふ約束に主が堅く立ち、私たちを励まし続けてくださっている。目に見えない敵を前に右往左往する時に、主が共にいてくださる希望をいただいて。</p>
<p>9日 (土)</p> <p>歴代誌下 21章</p>	<p>「しかし主は、ダビデと結んだ契約のゆえに、ダビデの家を滅ぼそうとはされなかった。主はダビデとその子孫に絶えずともし火を与えると約束されたからである」(7節)。イスラエルの民の心が主から離れても、主はダビデとの約束を守り続けた。ダビデとの契約は、イエス・キリストによって私たちとの契約として今与えられている。</p>
<p>10日 (日)</p> <p>歴代誌下 22章</p>	<p>「アハズヤの母アタルヤは息子の死んだのを見て、直ちにユダの家の王族をすべて滅ぼそうとした」(10節)。王の継承をめぐる腹黒い争いを見ると、神への信仰は「お飾り」であり、王権を立てる「道具」にすぎないことが分かる。私たちが神を礼拝するのは何のためか。神の御旨に従い、神の前に小さくされる信仰だろうか。点検しつつ、主の日の礼拝に臨みたい。</p>